20240309 受難節第1主日

司式:佃　雅之

奏楽:吉田千鶴子

前奏:「父なる神よ　われらとともに住みたまえ」(J.G.ワルター)

招詞:主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。呼び求めよ、近くにいますうちに。主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。(イザ55:6.7b)

讃美歌　83 聖なるかな

交読詩編:91:1-16

01 いと高き神のもとに身を寄せて隠れ/全能の神の陰に宿る人よ

02 主に申し上げよ/「わたしの避けどころ、砦/わたしの神、依り頼む方」と。

03 神はあなたを救い出してくださる/仕掛けられた罠から、陥れる言葉から。

04 神は羽をもってあなたを覆い/翼の下にかばってくださる。神のまことは大盾、小盾。

05 夜、脅かすものをも/昼、飛んで来る矢をも、恐れることはない。

06 暗黒の中を行く疫病も/真昼に襲う病魔も

91:7 あなたの傍らに一千の人/あなたの右に一万の人が倒れるときすら/あなたを襲うことはない。

91:8 あなたの目が、それを眺めるのみ。神に逆らう者の受ける報いを見ているのみ。

09 あなたは主を避けどころとし/いと高き神を宿るところとした。

10 あなたには災難もふりかかることがなく/天幕には疫病も触れることがない。

11 主はあなたのために、御使いに命じて/あなたの道のどこにおいても守らせてくださる。

12 彼らはあなたをその手にのせて運び/足が石に当たらないように守る。

13 あなたは獅子と毒蛇を踏みにじり/獅子の子と大蛇を踏んで行く。

14 「彼はわたしを慕う者だから/彼を災いから逃れさせよう。わたしの名を知る者だから、彼を高く上げよう。

15 彼がわたしを呼び求めるとき、彼に答え/苦難の襲うとき、彼と共にいて助け/彼に名誉を与えよう。

16 生涯、彼を満ち足らせ/わたしの救いを彼に見せよう。」

朗読聖書①申命記30:15-20

15 見よ、わたしは今日、命と幸い、死と災いをあなたの前に置く。

16 わたしが今日命じるとおり、あなたの神、主を愛し、その道に従って歩み、その戒めと掟と法を守るならば、あなたは命を得、かつ増える。あなたの神、主は、あなたが入って行って得る土地で、あなたを祝福される。

17 もしあなたが心変わりして聞き従わず、惑わされて他の神々にひれ伏し仕えるならば、

18 わたしは今日、あなたたちに宣言する。あなたたちは必ず滅びる。ヨルダン川を渡り、入って行って得る土地で、長く生きることはない。

19 わたしは今日、天と地をあなたたちに対する証人として呼び出し、生と死、祝福と呪いをあなたの前に置く。あなたは命を選び、あなたもあなたの子孫も命を得るようにし、

20 あなたの神、主を愛し、御声を聞き、主につき従いなさい。それが、まさしくあなたの命であり、あなたは長く生きて、主があなたの先祖アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた土地に住むことができる。

朗読聖書②マタイによる福音書4:1-11

◆誘惑を受ける

01 さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒れ野に行かれた。

02 そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。

03 すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」

04 イエスはお答えになった。「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』/と書いてある。」

05 次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、

06 言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。『神があなたのために天使たちに命じると、/あなたの足が石に打ち当たることのないように、/天使たちは手であなたを支える』/と書いてある。」

07 イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。

08 更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、

09 「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。

10 すると、イエスは言われた。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、/ただ主に仕えよ』/と書いてある。」

11 そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。

祈祷

私たちの命の源であり、永遠に私たちを導き守ってくださる神さま、あなたの聖なるお名前を心から褒め称えます。御国を来たらせ、この地をあなたの御支配の下に治めてください。

神よ。この朝私たちはあなたの限りない憐みによって、この礼拝堂で、またライヴ配信によって御前に集い、あなたを礼拝することができますことを心から感謝致します。どうぞ、この礼拝において御心をお示しください。

父なる神さま。あなたはあなたの独り子を十字架につけることを惜しまず、私たちの罪を帳消しにしてくださいました。御子キリストは私たちのために侮辱され、着ている物を剥ぎ取られ、荊の冠を被せられ、十字架に付けられました。これらすべて、私たちの罪の故であることを、私たちの罪を贖うためであったことを、この礼拝において私たち一人ひとりが鮮明に思い起こすことができますように。私たちが自分の罪の深さを自覚して、主の担ってくださった十字架の重さを僅かでも知ることができるようにしてください。私たちはあなたに赦されていながら人を赦すことができず、自分の義(ただ)しさばかりを主張し、罪を犯し続ける者であります。主よ、私たちがこの礼拝に与ることで、悔い改めて、新しい出発ができように、この朝、十字架の言葉をお語り下さい。

神さま。今週私たちは東日本大震災発生から14年の時を迎えます。2013

年3月11日、私たちの国は大地震と大津波、そして原発事故によって大きな悲しみと人間の犯した過ちの大きさを知る日々を歩み始めることになりました。被災地には今も多くの課題が残されています。被災された人たちは新たな課題に苦しまれています。また今、大船渡では大規模な森林火災が起こり、再び大きな不安の中での暮らしを余儀なくされている方が大勢居ります。

主よ、あなたの慰めと励ましの御力が被災地の方々の上にありますように。傷つき、渇き、痛む全ての人が、あなたの恵みの中に生きることができるように、被災地で福音を語る者たちを強めてください。私たちも時間的空間的隔てを超えて、被災地の、被災された方々の隣人であることを忘れることなく、譬え僅かな働きであってもその務めを果たしていくことができますように、為すべきことをお示しください。

愛なる神さま。今日のこの礼拝に集うことの出来ない友たちのことを覚えて祈ります。病のため、高齢のために、教会に来ることができない私たちの友を助けてください。あなたが私たちの愛する友一人ひとりの所に直接訪ね、慰めと励ましをお与えくださいますように、切にお願い致します。

私たちの主よ。今年度の教会総会を感謝致します。総会によって新年度に向けての必要な働き、また課題があなたによって与えられました。主よ、どうか、私たちがその担うべき役割を、課題を負って、確かな歩みを進めていくことができますように、あなたが何時も私たちと共にいてください。特に、私たちが新たに選出された長老のために祈り、長老会の働きのために祈り、共にその重荷を担い、一つとなってひたすら主に仕えることができるようにしてください。

私たちの主よ。今日の説教者を感謝します。この礼拝ではあなたの召しに応え神学校での学びを終えた堀尾隆さんが説教をしてくださいます。主よ、あなたの霊で堀尾隆さんを充たしてください。これまでの学びの日々をあなたが祝福してください。その口を通して、あなたご自身が御国の消息をお語り下さい。そしてここに語られます説教を、私たちが余すところなく確かに聞き取り、引き受けることができるようにしてください。

これらの祈りを主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌　284 荒れ野の中で

説教 「主を拝み、主に仕えよ」　堀尾　隆

本日、信濃町教会の皆さまと共に礼拝を献げることができます恵みを心から『感謝』しております。

私の神学生 2−3 年生の２年間、佃先生、鮎川先生をはじめ信濃町教会の皆さまには大変お世話になりました。約一年ぶりに皆さまとこのようにしてお目にかかることができまして大変嬉しく思っております。そのような状況の中、先週水曜日から教会歴『受難節』に入りました。イエスさまの御苦しみを覚えつつ日々祈りながら過ごしていきたいと思います。

さて、先月 3 月 3 日(月)、日本聖書神学校の卒業式が執り行われました。卒業生の中には感極まって泣きながら卒業証書を受け取った者も居りましたが、私はそのような思いにはなれませんでした。むしろ、大勢の来賓の前で緊張するだけで必死に心を落ち着かせていました。式後の謝恩会の時も同じでした。神学校時代の想い出を人前で話すことになったのですが、その時も緊張するだけでした。そして自宅に戻り、“**ようやく終わった！**”という気持ちになりました。少し安心して気持ちが緩みました。昨年に比しても卒業式に集まられた方がとても多かったように思われます。“**盛大に行われたのだな**”ということを後になって思いましたが、そのようなことを思いつつ暫くしてから、これまでの 5 年間の神学校生活を振り返りました。本来日本聖書神学校は 4 年制、ですが最初の 1 年目は聴講生として学ばせて頂きましたので、2 年目以降正科生として 4 年、計 5 年間の学びを得たわけです。私にとってこの5年間を一言で言い表すと『不安』という言葉に尽きると思います。勿論、私は神学校に入るにあたって献身の思いが与えられましたので、希望に燃えて何とか神学校の学びに必死についていこうと頑張りました。時には楽しんでもいたわけですが、授業においては宿題や課題が与えられ、期末には試験やレポートもありましたので、毎回々々それがクリアできるかどうか『不安』を抱きながら勉強していました。学年が上がると勉強の内容も難しくなり、やることも増えてきました。10 月の神学校日には諸教会からお招きを戴き奨励や説教奉仕の機会が与えられるのですが、その時には“**本当にできるのか？**”と準備の時に思っていました。4 年生になると卒業論文を作らなければならないので 4 月から着々と準備を積み重ねる、しかも毎週(月)(金)ある神学校礼拝日の金曜日を 4 年生は順番に説教演習として説教を担当していくのですが、その準備、更には、(先頃、終えることができましたのですが)補教師検定試験の時期を迎えるにつれその準備に追われるなど、諸事が重なって何が何であるかもわからない状況が続きました。当時、卒業した先輩方から聞いていた“**いやー、4 年生は本当に色々ありすぎて訳が分からなくなる**”、の言葉を思い出し、“**本当にそうだった**”としみじみ感じたわけです。次々に出て来る『不安』、今まで経験したことのないほどに、ずっと『不安』の中を過ごしてきたのだと思いました。神学校生活でのことだけではありません。家庭のこと、仕事のことも振り返りました。妻や子供に負担をかけてきたという思いもあり、そして支えられて、助けられてきたという思いもありました。仕事については色々あったわけですが導きがあって続けられたのだと思いました。

それらのことを振り返り、本当にこの 5 年間の歩みができたことに、ただただ神さまに『感謝』したわけです。私はこの5年間を振り返ったことで、実は神さまに『感謝』するということが当たり前ではないのだ、そのようなことに気付きました。この或る意味特殊な 5 年の過ごし方だったわけですが、それが特別なことだったので、神学校の生活を終えて神さまへの『感謝』の気持ちというものが深く出てきたのかも知れません。このような特殊な過ごし方というのは私たちの普段の生活の中で絶えずあるわけではないと思います。私たちの普段の生活は様々だと思いますが、朝は起きて、朝食をとって、その後、仕事に出掛け、学校にも出掛け、あるいは日中は趣味活動をした、健康維持のためにスポーツクラブに行ったり、時には友人などと過ごし昼ご飯を戴き、夕食の準備をして夕食を戴き、お風呂に入って眠りの床に就く。勿論、信仰という要素を入れれば、聖書を読む時間があって、神さまに祈るということがあるわけですが、夫々の生活スタイルにあって私たちの普段の生活は“**当たり前ではないのだ**”、一つひとつ神さまが備えて与えてくださっている、それらのことに『感謝』すべきなのです。私たちは日々の生活が当たり前すぎて、『感謝』して過ごすということを忘れてしまいがちです。人によっては忙しさによって、“**本当にそれどころではない**”、そういうこともあるでしょう。どちらにしても神さまに『感謝』をすることを忘れてはならない、『感謝』することが如何に大切なこ

とであるかを今日の御言葉の中から少し聴いていきたいと思います。しばらく、今日与えられた『**マタイによる福音書 4:1-11**』を見ていきたいと思います。まず、1-2 節、色々と出て来るので細かく見ていきたいと思います。

1 節「**さて、**」から始まりますが、それは本テキストの手前 3 章で、イエスさまが洗礼者ヨハネから洗礼を授けられる場面が今日の始まりであることを示しているわけです。3 章においてはイエスさまが洗礼者ヨハネに“**今は洗礼を受けさせてほしい**”、そのように言ってヨルダン川で洗礼を受け、その後天が開いて「**神の霊が鳩のように**(3:16)」イエスさまの上に降って来た、という場面になります。神の霊に充たされたイエスさまが、次は、「**悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒れ野に行かれた**」のです。この「“霊”」とは、口語訳で見ると「**御霊**」と訳されていました。ですから霊は『**神の霊**』ということになります。その「“霊”**に導かれ**」る、とでてきますが、原典(**アナゴー** ἀνάγω)に当たると「**引き挙げられる**」、そのような意味のあることが分かります。イエスさまは自分から出向いて行ったわけではない。神の霊に導かれるままに進んだ。もしくは引き挙げられるのですから、これは空中へと引き挙げられるというような印象を持つ言葉です。神の霊によって引き上げられた。イエスさまは神の霊に導かれて荒野に行かれた。それは「**悪魔から誘惑を受けるため**」だったと言うのです。

荒れ野は地理的に常に岩と砂が象徴するような荒涼とした世界で、また住む人のいない所、見捨てられた町、住民の少ない地域で人里離れた寂しい所を表す。そのように文献をあたると書いてありました。なので、今回の通り、悪魔から誘惑を受けるのに格好な場所となっているわけです。

しかし一方、荒れ野は神の言葉が臨む場所でもあります。洗礼者ヨハネが言っています。「**荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』**(3:7)」と、イザヤ書(40:3)の聖句を引用した通りで、そして神に近づく機会を与える場所なわけです。出エジプト記に出て来る神の山ホレブ山(出33:6他)、シナイ山(9:11他)、そういった場所がそうです。モーセはそこで主との交わりを得ることになるのです。この様に荒れ野には二つを兼ね備えている場所、悪魔もそこに来るし、神に近づく機会が与えられる場所、この二つが備えられている、そのようにマタイの福音書では描かれているわけです。「**悪魔**」と訳されているギリシャ語は「διάβολος (**ディアボロス**)」、元の意味は「**中傷者**(**事例Ⅰテモ 3:11**)」、中傷するのですから事実ではない、悪口を言って人の名誉を傷つけるのです。「**悪霊**」は人間を神から離反させ、不従順に陥れさそうとする。罠を仕掛け、嘘をつき、人間の罪を生じさせ、高慢にさせ、兄弟を憎むようにさせる私たちにとってとても恐ろしい存在です。

荒れ野に導かれたイエスさまは、「**四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた**」と書かれてあります。「**四十日間、昼も夜も**」ということなので今の私たちで言う一日三食全て断食していたということです。「**断食した後、空腹を覚えられた**」とありますが、恐らく 40 日経過してから空腹を覚えられたのではなく、イエスさまが食事を断っている間は普通に空腹を覚えられたと思います。問題はここに出て来る「**四十日間**」ということです。これは特に旧約聖書のモーセのことと繋がってきます。モーセはシナイ山の頂で主との交わりをするために、「**四十日四十夜**(**出 24:18**)」、過ごしました。神との語らいの中で『**十戒**』を告げられ、石の板二枚がモーセに授けられました(**出 24:12**)。そしてこれからシナイ山を下っていこうとしたとき、その麓でずっと待っていたアロンやイスラエルの民はモーセが降りて来ないことでしびれを切らせたイスラエルの民たちはアロンに言います。自分たちの拝む神を作って欲しいと。そこでアロンの指示で民たちが付けていた耳輪を集めて『**金の子牛**』を作って祭壇を作ってそれを奉ろうとしていた(**出 32 章**)。主がモーセに急ぎ下山するように命じられて慌てて戻ってモーセがその現場を見たときに怒りに燃えました。そして神から授かっていた石の板二枚を投げつけて砕いてしまいます(19 節)。モーセはイスラエルの罪を責めますが、その後、主に、この民の現状を悔い改めた結果、再度、主はモーセに改めて二枚の石を準備させ、シナイ山に昇って来るように命じられたわけです(出 34:1)。モーセは再びシナイ山を登って、その頂で「**四十日四十夜**」(**出 34:28**)留まりました。モーセはその間、パンも食べず、水も飲まず、断食を耐え忍んだのです。その後、二枚の契約の板を神から授かってシナイ山を降りてきました。

更に申 9:25 にも書いていますけれど、「**四十日四十夜**」、モーセは主の御前にひれ伏したことが書かれていますが、それはイスラエルの民に主が与える土地を前にして、“**その土地を取りにいきなさい**”そのように命じられたのですが、それにも拘らず、その主の命令に従わず、主に信頼しないで主の声に聴き従わなかった、そのためにモーセが神に向き合って祈った、この様にして、主なる神はモーセを選ばれ、裏切ったイスラエルの民と神との関係を回復し、保つために取り次いでいったわけです。

しかしこの神の民であるイスラエルの裏切りは、その後も、何度も何度も続いていったわけです。ですから飛躍しますが、ついには、神の子イエス・キリストがこの世に生まれて来なければならなくなったわけです。それは神との約束があっても、なお神を信じて歩むことができない罪深い状態にある沢山の弱さをもった希望も何もないような状態にある人間、その人間に回復を与えるために神さまは主イエス・キリストをこの世にお送りなられたわけです。イエスさまは、この後の公生涯で力強く神の福音を宣べ伝えていくことになりますが、しかしその前に荒れ野での誘惑があったというわけです。モーセが三度「**四十日四十夜**」の苦しみを味わったように、イエスさまも、この荒れ野において悪魔から三回の誘惑、質問を受けました。その悪魔は神の言葉を巧みに使ってイエスさまを誘惑するのです。

この悪魔の誘惑の最大の目的、それはイエス・キリストが本当に神の子であって救い主であるのか、その問い掛けです。それをダイレクトに悪魔はイエスさまに質問をぶつけて誘惑するのです。3節で「**誘惑する者が来て、イエスに言った。“神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。”**」、そして 6 節では「**悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて**(**5 節**)、**“神の子なら、飛び降りたらどうだ。天使たちが支える”と書いてある**」そのように言います。更に三つ目は 8-9 節のところで「**悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、“もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう。”**」

これらのイエスさまが悪魔から受けた三回の誘惑は私たちの普段の歩みの中で平気で出てきます。例えば 3 節に出て来る誘惑です。自分の希望や自分の都合、そういった欲求があって、神さまに自分の都合のいいように、“**どうか、この様にしてください**”、そのような願い、“**どうか石をパンに換えてください**”、そのように言っているのです。自分自身の歩みで遭遇する苦しみや悲しみの際、神さまに祈ります、“**どうしてですか？**”。その苦しみの思いをぶつけて自分の都合のいいように神さまに助けを求めていくのです。6 節の誘惑は、神を試みる様な事をするということです。これは別の方向から

言いますと、神さまに対して侮辱していることと同じ事です。神さまを神さまとして見ていないということです。そして 8-9 節の誘惑は、この世を自分の力で支配する、治めていくことができる、私たちは何時でも何時の間にか、こういった誘惑に曝されているわけです。

イエスさまはこれらの悪魔からの誘惑に対して適切な聖書の御言葉を用いて、**“神を試みない(7 節)、神のみに仕える(10 節)”**、そのようなことを悪魔に明言し悪魔に打ち勝ったのです。

イエス・キリストが本当に神の子であって救い主であるということを確定させたわけです。イエスさまは言います。「**退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』**(10 節)」、マタ 16:23 においてイエスさまがペトロに対して「**サタン、引き下がれ。**」と言ったことと同じです。ペトロはイエスさまの弟子として歩んでいたわけです。そのペトロはイエスさまのことを「**あなたはメシア、生ける神の子です**(同16節)」そのように言った直後にイエスさまが、**“これから自分は人に捕まって殺され、その後三日後に復活する**(同 21 節)”そのように言われました。そうするとペトロはすかさずイエスさまに**“そのようなことがあってはなりません**(22 節)”そのように言いましたが、イエスさまはその後ペトロに叱りつけた(前述23節)わけです。私たちもペトロと同じようなことをしていないでしょうか。イエスさまに対してペトロと同じような態度を取ってしまうのではないでしょうか。それは私たちの弱さであり罪であって自分たちではどうすることもできない。そのためにイエスさまは自ら十字架に架かる道を進んで行かれたわけです。

4 節に戻りますが、「**人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる**」というふうにイエスさまはその聖句(申 8:3)をもって悪魔に反論していくわけです。これはイエスさまが、**“人は、ただ物質的なパンによって生きるのではなくて、霊的な、また精神的な神の言葉によって生きなさい”**、ただそのように言っているのではありません。もしそうであるなら、**“私たちが今生きているこの世界のものが全て益ではない”**ということになってしまいます。そうではなくて、神さまは私たちの足りないところをよく知っておられる方、ですから神さまは私たちに与えてくださっておられるのです。**“既に神さまは私たちに与えてくださっている、そのことに『感謝』をしなさい”**。食べることだけではありません。着る物についても、また生活していくのに必要なものも、そして仕事のことも、学校のことも、色んな出会いも、結婚することについても、その後子どもが生まれるにしても、その後の日々の生活を過ごすことについても、とにかく**“全てにおいて神さまに『感謝』しなさい”**、そのようなことを言っておられるのです。神さまは与えてくださる方なのですから、**“神さまの言葉を信頼して、神さまにより頼んで生きなさい”**、と言われるのです。

『感謝』をするということを簡単に済ませてしまうということが多いです。祈りの中で**“『感謝』します”**というふうに祈りますが、自分でも結構軽々しく祈ることがあるなとちょっと反省というか、そのように思います。でも**『感謝』**をすることができるということは、与えてくださる神さまのことを知る、神さまとの交わりを大切にすること。ですが、私たち人間と神さまとの関係性ということがはっきりと分からないとなかなかか**『感謝』**するという気持ちがよく分からない。ですから私たちは御言葉に生きるのです。御言葉を大事にする。神さまは私たちのことを造られて、私たちを愛して止みません。そして私たち誰一人お見捨てにはなっておられません。私たちの救いをものすごく考えておられる方です。ですからイエスさまは十字架に架けられたのです。私たちの罪の為に死なれ贖われたわけです。

そのことに日々**『感謝』**して、主を拝み、精一杯の私たちの応答として主に仕えていく者でありたい、そのように願うのです。お祈りします。

恵み深い天のお父さま。この礼拝のひと時を**『感謝』**致します。イエスさまが私たちの罪の為に十字架に架けられ死んでくださいました。私たちの命を回復するために、あなたが荷を負って十字架に架けられました。そのことに心から**『感謝』**致します。私たちは日々の歩みの中で、どうか、この**『感謝』**することをより一層に覚え、ただ神さまのことを思い、神さまを拝み、そしてただひたすらにあなたに仕えていく者でありたい、本当に心からそのように願います。どうぞ、一人ひとりを助け導いてください。

この祈りを**『感謝』**をもって、主イエス・キリストのお名前によって御前にお献げ致します。アーメン。

讃美歌　510 主よ、終わりまで

献金・感謝(三木優)・主の祈り

父なる神さま。主にある兄弟姉妹と共に礼拝を献げることが赦されましたことを感謝致します。今日は堀尾隆さんの説教を通して豊かに御言葉を与えてくださり感謝致します。私たちがこの一週間を夫々の旅路の中で、御言葉を糧として歩むことができますようにお導き下さい。

私たちは必要な物を与えられ、主の僕として生きることが赦されていることを感謝致します。今、夫々が与えられた物の中から感謝と献身の徴を御前に献げます。どうぞ祝して教会の御用のために用いてください。

主が教えてくださった**「主の祈り」**を共に祈り、新しい日々を迎えさせてください。…。アーメン。

祝福:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。(佃牧師)

報告:⑴説教者堀尾隆さんへの感謝《礼拝後堀尾さん自己紹介.(佃牧師による)紹介と感謝の祈祷》。⑵週報記載事項の訂正(教会学校担当者名「山本典子」から「土屋昌子」へ。⑶再審法を求める国会請願の署名依頼

後奏:**「おお　神の小羊よ、罪なくして」**(J.S.バッハ)